

中国の農書について

加藤雄三（総合地球環境学研究所）

一、農書とは

オアシス・プロジェクトでは乾燥地における農業のあり方を歴史的側面も含めて考察しようとしている。中国史の中で農業関連情報を得ようとするとき、農業技術などを示した農書が主要な情報源なるであろう。しかし、一概に農書といっても如何なる内容を持ち、如何なる書籍が存在するかは、即座に分かるものではない。例えば、『広辞苑』では「農事に関する書籍」とされる。中国において最も権威ある『漢語大詞典』は「農業に関する書籍」とする。両者共に茫漠たる定義である。そして、これ以上の細かい定義をすることは実際においても無意味である。なぜなら、古典籍を分類する場合、現在最もポピュラーな四庫分類では主に子部農家類の中で扱われる（その他、史部政書類・時令類などでも扱われる）が、『四庫全書提要』の「農家類提要」も農事に関するあらゆる書籍が「農家類」のカテゴリーには含まれ、分類も蕪雑であると認めている。つまり、内容が雑多すぎて、詳細な定義をすることができないのである。

但し、農業或いは農学の研究対象を狭義・広義の二者に定義づけることはされている。狭義には「大田作物（広い土地に植え付け生産するイネ科作物や棉花などの作物）の生産」、広義には「水産業、農産品加工まで包括したもの（一次産業及びそれに関わる活動）」というのがそれである。

書かれた内容からすると農書は広義の農業について記述するものである。しかし、すべての農書が包括的な内容を持つわけではなく、個別の作物・事象を扱うものの方が多いことに注意する必要がある。

分類の目安を示すと、『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』では、

1. 総説之属
2. 農桑之属
3. 蔬果花木之属
4. 畜牧水産之属
5. 土産之属

王毓瑚編著『中国農学書録』では、

1. 農学通論
2. 農業気象・占候
3. 耕作・農田水利
4. 農具
5. 大田作物
6. 竹木・茶
7. 虫害防治
8. 園芸通論
9. 蔬菜及野菜
10. 果樹
11. 花卉
12. 蚕桑
13. 畜牧・獣医
14. 水産

という分類方法をとっている。

さて、農書と看做すべき多くの著作は、農書として編述されたわけではない。よって、過去の図書分類においては散在することとなった。つまり、かなりの関係ない著作が「農家類」に排列されると同時に、農学と関係する著作が伝統的な経（儒教の主要な經典とその解釈）、史（時間軸空間軸に亘る史実に関する書籍）、子（雑多な思想と技術）、集（文集及び詩集）の各部に散見されるような結果となってしまったのである。中国の農学史は農書を目録化する作業から始めなければならない状況にあった。こうした作業が進められた結果、以下の業績が生まれている。

天野元之助著『中国古農書考』（龍溪書舎 1975年）

王毓瑚編著『中国農学書録』

（龍溪書舎 1975年天野元之助校訂本、初版は農業出版社 1964年）

二、農書の内容

第一節に述べたように、農書は一概に規定することができないものであるが、王毓瑚は農書の系統と内容を以下のように定義する（上記分類はこの定義をさらに整理・細分化したものである）。

1.総合性農書

規模の大小はあるが、大田及び園芸作物の栽培、畜産と蚕業を基本的な内容とする。大田生産が主要な記述対象であるが、あるものは水産及び農具、水利、救荒、農産品加工をも含む。植樹を扱うこともある。但し、花卉、造林は含まない。

2.天時、耕作の専著

古典的農学の時候占トと耕作技術を中心として、農田灌漑、土壌、肥料等を扱う。

3.各種の専譜

果樹、蔬菜及び竹、茶等の経済作物、時に穀類に至るまでを品評するなどした専門的な書籍。水産、農具に関するものもある。量的には非常に多いが、内容はほとんど農学に関係ない。

4.蚕業専著

蚕業は植物生産と動物生産の二つの領域に跨るものである。ここから専著が非常に多く、狭義の農学に関する著作はほとんどがこの類である。

5.獣医書

牧畜学の性質を持つ著作。獣医書は少なくない。その中に家畜の飼育・管理に関する知識が含まれる。

6.野菜（天然植物）専著

この類の著作の大部分は品評の属に入れることができるが、農書と処理されてきた。天然の植物を以て栽培植物の不足を補おうとする発想から農書の列に入ったのである。

7.治蝗書

この類の書は地方行政人員が編んだものがほとんどである。虫害に関わるこうした書物は官刻され流通した。

8.農家月令書

農時を重視するところから出発して、過去において多くの農学家は「月令」の体裁を使って農書を著した。

9.日用百科全書的な農書

農村の居民の主要な生産活動は農業であったため、日用百科全書の中にも農業生産に

関する知識が扱われた。この種の書はおおよそ無名の人士の手になるものであり、その編著原則は先人を踏襲することにある。が、時に実践的知識を反映し、有名な専著に見られない情報も記されるため、貴重である。

三、代表的な農書と利用可能な版本

現在に至るまでには、多くの農書が編纂されてきたはずであるが、その多くは滅んでしまったものと考えられる。にも拘わらず、相当数の農書を我々は眼にすることができる。代表的なもの及び邦訳があるものを以下に時代順に掲げる。

前漢

・『汜勝之書』

漢代農書中の代表作とされる。宋代までに佚したが、清代に遺文が収集された。

萬國定輯釋『汜勝之書輯釋』（中華書局 1957年）

石声漢編・英訳；岡島秀夫、志田容子訳『汜勝之書：中国最古の農書』

（農山漁村文化協会 1986年）

後漢

・崔寔撰『四民月令』

毎月の子節に応じてなすべき農家の行事を誌したもの。対象は後漢の豪族。これも輯佚本のみが伝存する。

石声漢著『四民月令校注』（中華書局 1965年）

渡部武訳注『四民月令：漢代の歳時と農事』（平凡社東洋文庫 1987年）

北魏

・賈思勰撰『齊民要術』

中国農書の代表的存在の一つ。

第一卷：耕田・収種・種穀

第二・第三卷：五穀・瓜瓠・蔬菜の栽培・管理・利用・調整 第四卷：園芸・果樹

第五卷：蚕桑・竹木及び特用作物 第六卷：養畜・獣医・養魚

第七・八・九卷：麴・酒・醬・酢・染料等の製法、蒸・煮・炙・餅・飯の料理法、貯蔵法、甕の塗り方、膠・筆・墨の作り方 第十卷：中国物産でない五穀・果瓜・菜茹

石聲漢校釋『齊民要術今釋』（科學出版社 1957-1958年）

西山武一・熊代幸雄訳『齊民要術：校訂譯註』（アジア經濟出版会 1984年）

唐

・韓鄂『四時纂要』

『四民月令』と同様、月ごとに行うべき事柄を列挙する。但し、①具体的な農業技術を叙述し、さらに「農家暦」の性質を象っている。②占ト・禁忌等がおおよそ書物全体の十分の四を占め、迷信的な部分が多い。③『四民月令』ほど濃厚な地主経営の色彩を具有

していない。これら三点が『四民月令』と異なる点である。

『四時纂要:中国古農書・古歳時記の新資料』(山本書店 1961)

宋

・陳旉『農書』(1149年)

『齊民要術』以降に出された農書では、最も重要なものの一つ。

上巻：農業経営と栽培総論 中巻：養牛 下巻：蚕桑

萬國鼎校註『陳旉農書校註』(農業出版社 1965年)

文政十三年＝天保元年(1830)官版『農書』

(内閣文庫・静嘉堂文庫・国会図書館白井文庫蔵、句読・返り点あり)

大澤正昭著『陳旉農書の研究—12世紀東アジア稲作の到達点—』

(農村漁村文化協会 1993年)

元

・司農司『農桑輯要』

クビライが司農司に命じて作らせた官撰の農書。本来、華北を中心とした農業指導書として編纂されたはずだが、至元16年(1279)に中国全土を支配することになったため、南方の産物にも葉が割かれた。但し、稲作については『齊民要術』が引かれるのみである。

繆啓愉校釈『元刻農桑輯要校釈』(農業出版社 1988年)

・王禎撰『農書』

古今の農書・典籍を利用して、王氏が自ら南北の土地を踏査して、従来の農書が或いは華北の畑地農業を対象として、或いは華中の水田農業を採り上げたのに対し、本書は南北に展開する(広義の)農業を初めて統合して記述すると共に、その異同得失を分析比較して、特に生産用具に留意して集大成したもの。

繆啓愉訳注『東魯王氏農書訳注』(上海古籍出版社 1994年)

・魯明善撰『農桑衣食撮要』(『農桑撮要』)

元の三大農書の一。月ごとにいかなる作物・事物をどのように扱うべきかを記す。

王毓瑚校註『農桑衣食撮要』(農業出版社 1962年)

明

・『居家必用事類全集』

明代の日曜百科全書。丁集に牧養良法、戊集に農桑類あり。

『北京図書館古籍珍本叢刊61』(書目文獻出版社 1988年)

寛文十三年(1673)京都松柏堂刊本

・朱橚『救荒本草』

飢饉の際に役立つ植物を絵入りで解説する。

『救荒本草』(中華書局 1959 年)

徐光啓纂輯;張國維鑒定『周憲王救荒本草』(京都:長松堂 寛政 11 年(1799))

・『便民圖纂』(1502 年)

農業・園芸・養畜等の農業技術の知識と、医薬上の民間処方載せ、それに飲食器用の常識と、陰陽占ト等の迷信を誌す「農家宝典」のようなもの。

石聲漢・康成懿校注『便民圖纂』(中華書局 1959 年)

内閣文庫蔵江戸時代鈔本

・劉基編『多能鄙事』

卷一—四: 飲食、卷四: 服飾、卷五: 器用、卷六: 百薬、卷七—十: 農圃・牧養・陰陽、卷十一: 占ト、卷十二: 占断・十神に分かれる。人々の日常必要な常識を録した家庭宝鑑。農圃類・牧養類は卷七に輯められ、前者は作園籬法・種水果というように主として園芸作物の栽培法を述べる。後者は牛馬の善し悪しを見る法・獣医知識・養畜法が述べられる。

四庫全書存目叢書子部 117 (上海図書館蔵嘉靖四十二年范惟一刻本)

・王圻編『三才圖會』

類書の代表的存在。絵図が付され、ある程度参考になる。

『三才圖會』(上海古籍出版社 1988 年)

・熊三拔撰『泰西水法』

イタリア人 Sabbatino de Ursis の口述を徐光啓が編訳したもの。水利関係の知識を記す。

上海市文物保管委員會主編『徐光啓著譯集 9』(上海古籍出版社 1983 年)

・鮑山撰『野菜博録』

江西婺源の鮑山が黄山に庵を編み、七年間つぶさに野菜を嘗めて著録したもの。『救荒本草』から借用した文章が多い。

『四部叢刊三編』所収

・徐光啓『農政全書』

明末の総合性農書。

石聲漢校注『農政全書校注』(上海古籍出版社 1979 年)

・宋應星撰『天工開物』(1637 年)

明末の産業諸部門の技術を叙述し、その半ばは農業に割かれる。絵入りであり貴重な資料。

中華書局影印本(1959 年)

藪内清訳注『天工開物』(平凡社東洋文庫 1969 年)

・沈某撰『沈氏農書』

逐月事宜、運田地法、蚕務、家常日用を収める。

張履祥輯補;陳恒力校點『沈氏農書』(中華書局 1956 年)

『學海類編』本

清

・張履祥撰『補農書』

『沈氏農書』の補編。

・『欽定授時通考』(1747 年)

乾隆帝があらゆる書籍・文書に見える農事に関する記述を広く収集し、これを天時・土宜・穀種・功作・勸課・蓄聚・農餘・蚕桑の八門に分類編述させたもの。一種の便利本。

馬宗申校註;姜義安參校『授時通考校註』(農業出版社 1991 年)

明治十四年(1881)東京南伝馬町二丁目有隣堂翻刻本

・汪志伊撰『荒政輯要』(1805 年)

防蝗関連の書。

近代中國史料叢刊 3 編 54 輯 538(文海出版 1989 年)

・包世臣撰『齊民四術』(1844 年)

華中の農業についての考察。

潘竟翰點校『齊民四術』(中華書局 2001 年)

・黃輔辰撰『營田輯要』(1864 年)

田地経営について古今の書物から関連記事を収集したもの。

同治三年(1864 年)貴筑黃氏刊本